
人外の過程物語

ウロボロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人外の過程物語

【Nコード】

N0673M

【作者名】

ウロボロス

【あらすじ】

自分の目でみた世界はつまらなかった。
世界は醜く、色の無い世界モノクロで気持ち悪い。
ああ、こんな世界の僕は何なんだろう？

始めました。初心者が無謀にも挑戦する、多分ファンタジーな物語。
語。

お目汚しは確実です。

自己満足な為に更新は不定期です。

思考（前書き）

はじめましてウロボロスです。蛇^{へび}円^{まる}です。

リアルが忙しいのに無謀にも投稿なんてしてしまいました。

お目汚しは確実の駄文ファンタジーが始まります。

思考

いつからだろうか

世界がとてくだらなくて醜いと感じるようになったのは

自分の目で見た世界は汚くてツマラナイ世界

大人たちは平気で他人を蹴落とし金と名誉のために手段を選ばない。

子供は無知である故に腐った大人に影響されていじめ等のくだらない行為を平気でする。

皆の必死に生きている姿がどうにも醜く思えて仕方ないのだ。

まるで、人の生きている輝きというか個人という色の無い世界に見える。

「どうして、世界はモノクロなのだろうか。色のない世界に意味はあるのか？」

聞いているのか神様とやら……。」

呟く声に答えがあるはずもなく。

街の喧騒に呟きは飲み込まれて消えていく。

-
-
-
-
-
-
そう、いつからだろうか。僕が独りになったのは。

第一章 日常

目が覚める。

身体が重く、頭が割れるように痛い。

とてもじゃないがさわやかな朝とはいいがたい。

学校は休もうかなとも思うが時計を見て諦める。

時間は7時58分だ。

後2分でうるさい奴が来る。

僕のことなどお構いなしに引っ張っていく迷惑な腐れ縁の友人

今日も日常が始まる

いつもと変わらない日常が。

ダンダンダン!!

扉を乱暴に叩く音で奴が来たことが分かる。

「おーい文月！！ 今日も元気に登校だ。開けるぞ？」

返事をする前に部屋に入る無礼な腐れ縁の友人、上倉 浩司。

ちなみに、ここは学生寮なので浩司とはお隣さんだったりする。

ここで登場 かみじょう 上條 浩司 こうじ

年齢 18

外見はまあ、イケメンという奴だろうな。 うん、死ねば良いよ。

性格も明るくお人よし。

外見と性格が合わさってかなりの人気者なのだ。

しかし、こいつの欠点はあらゆることに鈍感で今ひとつ危機感を感じないことだと思う。

「もしもし、文月もしかして寝ぼけてるのか？」

「うっさい。 頭痛がすんだよ。ほっとけ。」

「またかよ。 いいから学校に行こうぜ？ 大好きなあの子が待ってるぜ」

うっわ・・・うざすぎるし。

それにあの子って誰だよ・・・。

「わかったから出て行けよ。ちゃんといくから。」

そついうと問答無用で浩司を追い出す。

「ちゃんとこいよおおお！！ 先に行ってるからな！！」

毎日僕を起こしにくるなんて面倒な奴だ。
ちゃんと行くと言ったからには用意して行くか。

・・・お昼ぐらいに。

- - - - -

僕の通っている学校は私立神間学院

特徴としては人工島の中にある隔離された施設で学生は全寮制で校風は学生の自主性を伸ばす名目で放任主義だ。

島には警備員ガードマンが在住しており大人の殆どは警備員か教員で構成される。

昼休みのチャイムが鳴り、教室は堅苦しい雰囲気から解放された学生達でにぎわっていた。

そんな面倒な場所には行かずに静かな場所を探して、すぐに面倒になってやめた。

とりあえず、保健室に行くことにしたのだ。

屋上という手もあったが、屋上はもう浩司に知られているので多分うるさいはず。

それにこの学校の保健室は保険医が滞在しておらず、かといって生徒がたまっている訳でもないので基本的に放置されている。

問題を起こさなければ自主性に任せるといふ校風は世の中の学校の中でも特殊なのではないだろうか。

静かな空間は外の喧騒から僕を隔離してくれる。
ちょうど良いのもう一度寝よう。

そんな事を考えていると来訪者が訪れたようだ。

「わるごわいねがあ?」

「いません。帰ってください。」

「ひ、ひどっ!! せっかくボケたのにい」

制服のリボンが赤色のところを見ると一年生のようだな。

「って、誰?」

きょんととして聞いてくる頭のネジが緩い女子生徒

「三年の辰巳だ。」

「さんねんのたつみせんぱい・・・別名イケメソのオマケ!!」

かつちーんときたぞ!!

オマケは酷いと思いません!?

「ひどいな・・・お前こそ誰だよ。僕は下級生にオマケ呼ばわりされる覚えは無いんだが。」

「あ・・・ははは、先輩でしたか。こりやまた失礼しました。」

「まあ、いいけども気をつけるようにな。お前が仮にも性別が女で無いなら殴り飛ばしていたかもしれないし。」

そういうと、頬を引きつらせながら「あは、あははは・・・」と乾いた笑い声を上げていた。

「ところで先輩は保健室で何をして・・・もしかして体調でも悪いんですか？」

「いや、ただの休憩のつもり。お前は体調が悪いわけでもなさそうだが、何しにきたんだ。」

「ぶーっ、そりや体調悪いわけじゃないですけど・・・友達が怪我したから絆創膏と消毒液を取りに来ただけですよ。」

わざとらしく頬を膨らませて「ワタシはフキゲンです。」と自己主張している女子生徒に一言

「なあ・・・入ってきたときの何？」

「・・・忘れてください。人がいるなんて思わなかったもので・・・。」

「そう落ち込むな、誰にも言わないし見たこと聞いたことは忘れるから帰れ、な？」

そついうと黙って保健室を出て行く女子生徒
やつとうるさいのがいなくなった。

これで、また安眠できる。

「フミ！！ 探したぞ。さあ、一緒に飯を食おう。学食がいいな。そつしよう、何してる？」

急ぐぞ、席がなくなっちまう！」

「うつさいわこのボケがああぁっ!!」

「どうした？ 行くぞ？ 行くからな、早くしろよ。」

言いたい事だけを言うと乱入者こと浩司が学食に向かって走っていた。

今度一発殴っておこう。

それでは、おやすみなさい。

第一章 日常（後書き）

まず、すみませんです。

ぐだぐだで申し訳ないです。

短いのは愛嬌です。・・・嘘です。

妄想のみで出来ているので矛盾などが出ると思いますが、出ないように頑張りたいです。

簡易プロフィール

辰巳 たつみ 文月 ふみつき

主人公

世の中を冷めた目で見る少年

極度のめんどくさがりで人と関わるのを避けている。

放浪癖があるが本人は治す気がない。

卑怯を好み卑劣を嫌う変わり者。

親友との関係は利害関係なんてないただの腐れ縁

上條 かみじょう 浩司 こうじ

自称 文月の親友

イケメンであり、お人よしのため男女問わず人気がある。
見ていて腹の立つことには真正面から立ち向かう熱血漢な面を持つ。

泡沫

起きるんだ自分。

もう朝だ。時間ギリギリだぞ。

学校へ行かないと。

そう思いベッドから起きようとするも身体が動かない。

これはあれだ。金縛りに似ている。

全身が言うことをきかずに麻痺したような感覚で、まわりからはまわりつくような視線を感じる。

起きていて、前を見るがずっと暗いままだ。

途中で自分は目を開いているのか疑いそうになるが間違いなく目を開いている。

思考にふけり、時間の感覚を忘れかけた頃に老人のようなしわがれた声が僕に話しかけてきた。

「汝、何を望む？

何ぞ世界を見ぬ。

何ゆえに拒絶を示す。」

「何を言ってるんだ!？」

誰だよ!!! 此処はドコなんだ? 答える!!!」

「世界は美しい。

世界は煌びやかで繊細だ。

世界を視よ。我を視よ。己を知れ。

――――若き神の子よ。」

まるで自分の話を聞いている。

いや、聞こえていないのだろうか。

言っていることは意味不明だが心に響く不思議な声だ。

「なんだってんだ……。

世界ってなんだよ。アンタを視ろってどうやって?!

自分を知れて……知った風なこと言っなよ!!!」

口から本心が漏れだしていく。

普段感じていながら目をそらし続けていたこと。

「……知ってるよ。無知で無力で惰性で生きてる矮小な存在だ。それでも、出来ることが分からないんだ……。

知ってるなら教えてくれ……。もう、何も出来ないのは嫌なん

だ！！」

これが僕という小さな小さな人間の全て。

昔からたいていのことはそつなくこなしてきたが
たいていのことで一番にはなれない。

虐められていた友達を助けることも出来なかったし。

雨の日に川に落ちた犬を助ける勇気も無かった。

無力を嫌っているのにどうすれば良いのか分からない。

ふがない自分への怒りが行き場をなくして心を軋ませ、頭の奥で
暴れまわっている。

「目を覚ませ。

力ならすでに持っているはずだ。

汝は矮小な人間ではない。

何かをしようと思えば出来ぬことは無い。己を信じよ。

世界を回り。世界を感じる。

世界は美しい。世界は儚い。

さあ、行くのだ我が子よ。神の子よ。楽しんで来るがいい。」

話しかけていた声にはいつの間にか慈愛に満ちていた。

「・・・嫌な感じだな。虫の知らせってやつか？」

どうにも嫌な予感を感じながらも学校へ向かう用意をはじめた。

泡沫（後書き）

次くらいに異世界にいきたいっすわ

異世界

学校からの帰り道

時刻は19時を少し回っているところだ。

何故、こんな時間になったかというと

部活には入っていないが浩司の剣道部の試合の助っ人に付き合っ
て、その後に打ち上げをしていたらこんな時間になってしまった。

だらだらと街灯の少ない路地をあるいていると、道の片隅に『占い』
と看板を出した老人が僕たちを呼び止め、意味のわからないことを
言う。

「お前さんたち・・・選ばれたんだね。
頑張っ生きておいで。」

お前さんたちこの世界では過ぎた力を持っている。
どう生きるはお前さんたち次第だよ。
さあ時間だ。」

「アンタ、なにを・・・」

親友の浩司が光に覆われる

眩しすぎて直視できないくらいだ。

「フミ！」

浩司がとっさに叫ぶが、僕は僕で大変なのだ。

体を覆う闇

まるで意識を持っているかの様に僕に絡んで離そうとはしない。
もがけばもがくほど体に絡みつき侵蝕していく。
僕をこの世界から遠ざけていく。

こうして浩司と僕は世界とサヨナラをしたのだ。

何だったのだろうか、あの闇は……。

そして此処は何処だろうか、周りにいる人間達は何者なんだ？

瞳に映るは恐怖と期待、そして好奇心

「……あの、ここはどこでしょうか？」

いつの間にか起きたのだろうか。

浩司が間の抜けた顔で聞いた。

だが、周りの人間達は話を聞きもしない。

「おお、勇者が二人も召喚されてしまった。」

「どういうことだこれは！」

「巫女を、巫女を呼べー！」

「おい、片方は黒髪黒目だ。まるで魔人の様だぞ」

「お前は何を言ってるんだ？！失礼であろう。」

ざわざわと騒ぐおっさん達だが巫女姿の少女の登場により

冷静を取り戻していく

「皆さん、落ち着いてください。」

勇者達の前なのです？ 取り乱してどうすると言つのですか。」

神官と思われる男性達から「私としたことが」などの言葉が伺える

「あのっ！　ここどこ？！　聞してるのかよ！」

無視をされることを嫌っている浩司が口調を荒げる

青い髪の少女がこちらに向き直るとにこりと笑った

「ようこそ勇者様方、どうか私たち光の民をお救い下さい。」

呆気にとられる浩司の変わりに僕が口を開く

「ふざけるな。　ここは何処だと聞いている。」

巫女と呼ばれた少女を鋭く睨みながら質問をする

乱暴な物言いに周りの人間達はきよんとしている

僕をまるで怪物か何かを見るように瞳には恐怖が浮かんでいた

だが巫女の瞳には好奇心が宿っている

僕には理解不能だ

改めて周りを見渡す

石造りの部屋に西洋魔術に出てくるような魔法陣

おそらくここは何かの儀式場だろう

一呼吸おいてから少女が語りかける

「申し遅れました。私はイスナ・フォン・メイザース。
光の巫女を務めるものです。あなた方を召喚したのは私たち神殿
の者たちなのです。」

「はぁ、どうも」

浩司が間の抜けた返事をする

どうやらこの巫女に目を奪われているみたいだ

神経を尖らせて隙をうかがっている自分がバカらしい

「俺の名前は上條浩司でこっちが辰巳文月だ。」

「ちょっ！ 浩司ってば少しは考える阿呆が」

「あほって言うほうがあほなんだぞ！！」

イスナがくすりと笑い、一礼をもって歓迎の言葉を紡いだ

「改めて、セイナム王国へようこそ。 勇者様♪」

こうして、僕、文月の異世界での生活が始まるのであった

異世界（後書き）

ヤヴァイっすよ

自分の才能にぜつばうだあ！！

似たもの同士の勇者と王と勇者

諸々の説明を受けてから客室に通されると待っているようにとの指示を受ける

「マジか・・・僕にそんな力があんのかねえ」

説明によると召喚対象には召喚されるときに《世界》に触れるため

特殊能力と高い身体能力が身に備わるといふ

人型であった場合は身体能力の上昇と制約

魔物型である場合は制約のみだといふ

勇者召喚は例外であるため身体能力の上昇の恩恵は受けながらも制約という足枷は免除されるらしい

それに、勇者とくれば魔王を想像するだろうが敵は邪神だといふから驚きだ。

よりもよって神が相手かよとか切実に思うが実感はわからない。

まあ、精霊やら女神やらが人間に加勢しているらしいがどれほどのものかも想像がつかない。

そんなことを部屋でボーッと考えていると。

コンコンと控えめなノックの音が部屋に響いた。

僕の返事を待たずに「失礼します」とメイドが部屋のドアを開ける。

メイドだけかと思ったが、メイドの開いたドアから年齢14歳といったところだろう

豪華なドレスに身を包んだ少女が現れる

髪型はショートで綺麗な金髪だ。

「はじめまして、勇者様。私はセイナーム王国第四王女メルティス・アルクト・セイナームと申します。」

自己紹介をする少女の仕草には気品が漂う。

自分とは違いすぎて気後れをするだろう普通ならば、まあ、僕にはどうでもいいことだけれども。

「……ども、辰巳です。」

「タツミ様ですか。変わったお名前ですね。」

何がおかしいのか微かに笑う王女

「では『これ』に着替えてください。その後にお披露目です。」

「着替えるのはいいですけど、お披露目って何ですか？」

「それはもちろん、勇者様のお披露目です。」

ニツコリと笑いながら爆弾を投下する姫様

勇者として行動する気のない僕にどうすればいいというのか？

「お披露目ではえっと・・・勇者の心得みたいなものを宣言してから聖剣の授与になります。」

「聖剣ね・・・ちなみに聖剣とは何本もあるものですか？」

「基本的に聖剣は世界に数本しかないといわれています。我が国が所有しているのは3本です。」

蒼天の聖剣と深緑の聖剣、あと蒼地の聖剣です。

蒼天の聖剣は片手剣で深緑の聖剣は短剣、蒼地の聖剣は大剣です。」

「へえ、聖剣って武器としていろんなモノがあるんですね。」

「はい。えっと、そろそろ時間なので着替えてくださいね？」

部屋から出ようとするメルティス王女に聞いておきたいことがある。

浩司の事でアイツはどういう宣誓をするかだ。

「ちょっと待ってください。

アイツの・・・浩司の宣誓の内容について教えてください。」

「それは・・・本当は教えてはいけないのですが、特別ですよ?」

そういつて笑った顔は悪戯好きの歳相応の少女だと思った。

「皆の光でありたい、正々堂々と戦う正義の味方になりたいっておっしゃってましたよ。

ふふっ、それではまた後でお会いしましょう。」

一礼して出て行くメルティスはどこか楽しそうだった。

ちなみに着替えた衣装はいかにも勇者を意識したもので細かな装飾が施されているが

勇者のイメージと違ふとすれば黒を基調としている事ぐらいだ

「まあ、勇者というより黒騎士ですね」

着替えが終わり、部屋に来たメルティス王女の第一声がこれだった。これじゃあ魔界の貴公子とか悪いイメージしか相手に与えないような気がするのだが。

赤い絨毯の廊下をしばらく歩き、途中で白を基調とした服を身に纏い巫女に案内される浩司を発見

腐れ縁の親友との再会を果たすが言葉は交わされないまま黙々と歩きたどり着いたのは恐らく謁見の間

絨毯の先には王座と思われる椅子に偉そうに足を組んで座っている壮年の男が一人

絨毯の両脇には大臣や貴族と思われる人間が多数

勇者という称号の授与式とでも聞かされているのだろうか

「お主等が今回の儀式で召喚された勇者か……。」

偉そうに座っている男が呟く

なんとも傲慢そうな物言いが僕の癪に障る

「ええ、お父様。 勇者コウジ・カミジヨウと勇者フミツキ・タツミです。」

「うむ。 では、これより継承の儀を執り行う。 両者前へ出よ。」

メルティスがお父様と呼ぶ。

つまりこの国の現国王だろつ。

王に促され前に出る浩司

だが僕はその場を動かなかった

怪訝な顔をする周りの人間をしりめに王は気にした様子もない

「では、汝は勇者として何を成す？」

「・・・・・・」

僕は何も応えない

すると浩司が気取った態度で応える

「光をもって悪を浄化します。そして総ての人々に平和をもたらすと約束しましょう。」

恭しく一礼して一步下がる浩司

王の視線が僕へと移る

「して、汝は何をなすのだ」

高圧的な態度が癪に障る

マジでこいつ殺してやろうかというほどムカつく
救ってもらふ身分のクセに生意気すぎる

こんなヤツは滅びてしまえばいい

それに浩司のやつが綺麗事並べるなら僕は僕でやらせてもらおう。

そんな想いを込めたつぶりと悪意を含んだ言葉を選ぶ

「闇をもって邪を滅し、不要な悪を殺しましょう。」

一瞬の静寂の後にザワザワとうるたえる貴族達

それはそうだろう。

今までの勇者召喚でこのような邪悪極まりないことを言ったのは文
月が初めてなのだ。

「なんてことだ」

「まるで魔族じゃないか！」

「乱暴な……。」

ざわつく一般ピーポー達

マジでうざい

何が悪いというのだ

悪こそが華、悪こそが正義

ものの本質を見失わなければ悪は正義に、闇は光にもなるというのに！！

宰相と思われる男が声高々に進言する

「王よ！ 勇者は一人で十分です。この、邪悪な者は勇者にあらず！！」

「だが、二人とも召喚の儀で現れたのだから資質は十分にあるはずだ。」

「しかし、このような考えでは勇者とは・・・」

宰相は唇を噛みしめ、自分を見もしない王を回りに気づかれないように睨む。

王は嘲るように笑う

「じゃあ、やめますよ勇者なんてモノは。」

一言放たれた言葉が謁見の間に静寂をもたらす。

「勇者なんてもの召喚された人間であれば誰でもいいのでしょうか？正義や民衆のためだけの勇者を求めるなら僕はそんなのやりたくありません。」

それに僕は・・・そう、私は悪を否定しない。それが勇者じゃないと言っのなら何です？ 悪魔ですか？ それも良いですね。だって強そうじゃないですか？」

そういつて口の端を吊り上げながらも笑いをかみ殺す。

王の両端にいる宰相や將軍などはこの状況でもうろたえたりしていない所を見るとなかなかの人物のようだ。

もしくは、腹に一物抱えているのだろうか？

王妃の目には憎しみ、又は反抗の様なものが潜んでいそうだ。

「面白いぞ小僧。 自らを悪魔と称すか！！ それなら闇の勇者とでも名乗るがいい。 ラディッツ將軍よ光の勇者に聖剣を、闇の勇者に魔剣を授けよ。」

茶髪のレストラン將軍と呼ばれた青年が驚き王に進言をする。

「よろしいのですか？

お言葉ですが、この者達の実力を測ってからでも遅くはないと思います

ますが。」

「よいのだ。」

「出すぎたことだということは重々承知ですが、一つお聞かせ願います。」

「なんだ。申してみよ。」

「聖剣はともかく魔剣を授ける理由をお聞かせください。」

王は口の端を吊り上げ悪人顔で笑いながら言った。

「面白そうではないか！！ お前もそう思っだろ、闇の勇者？」

「はんっ！！ 聖剣や魔剣なんて所詮道具です。使い方次第ですよ。」

静寂の中僕の小さな笑い声と王の愉快そうな笑いが空間を支配していた。

納得のしていない若き將軍に腹に一物抱えた宰相、そして何かを企む王妃。

この国は大変だな。
巻き込まれないように注意しなければいけないと思う今日この頃
でした。

似たもの同士の勇者と王と勇者（後書き）

だめだ。

小説を書くのは難しい。

・・・才能が欲しい。

そう、努力する才能が・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0673m/>

人外の過程物語

2011年10月7日01時29分発行